



恋を
している
迂回
ナイス害
はだし
スコラブ

恋をしている
迂回
ナイス害
はだし
スコラブ

2015.1

【目次】

連作

「正解だらけのJ - P O P」 中山俊一 (G u e s t)

「斉天大聖」 恋をしている

「企み銀河」 ナイス害

「ホームスイートスイートスイートホーム」 スコラブ

「ゆれる」 はだし

「カジュアルに死ね」 迂回

往復書簡

編集後記

トレインが走る田園あの虹も雨が降らなきや会えない光

今日もまた素数を抱いて眠る夜(素敵な服きて迎えに来てよ)

肌寒い夜には最小公倍数ふたりで求めた目を閉じながら

曇天に黄色いスカート選び抜く思考回路を愛してみたい

地獄でも人は恋に堕ちるだろう天国なんかイカレチマッタ

ねえニートン涙が込み上げてくるよニートンやっぱり涙は落ちた

低いレが一番好きなピアノストあなたの顔が思い出せない

紙パックの炭酸ジュースを君と飲む夢を見たんだ海色のペロ

トリッキーな図の解説はうわのそら幾何学模様の雪が降りそう

ステージへ降る紙吹雪千切る午後散々な日々舞え舞い上がれ

心地良い弱さが共鳴する街で垂れ流されているJ・POP

齊天大聖 恋をしている

猪の嗽のような銭湯が取り壊される僕俺あ、あ、あなたは
ポケットに珈琲豆のじゃらじゃらが糞過ぎて春 むしろ春風
痒いと言う雑誌を酷く掻き毟りあれえ齊天大聖の断末魔
接吻のハラデイなこと、よろしいなあ、あなた鮫鱈鍋の精霊
アブラハムの何人だっけ、分かんが全員体調不良の麻雀
酒を飲む男、素敵なバーチャルの砂吐く女、都合よく祈る
双生児が袋を提げてやってくる凄惨恐怖で僕は月に
玉葱の中に無数の雨が住みあなたの運動会のビデオを見る
鵜が口に溢れさせてる馬鹿の歯をあぶたらぼぎかからうば取り出す
五本指ソックス履いて笑い出すお前が曇天にしてしまう不倫

企み銀河

ナイス書

殿中でごさる殿中でごさると駆け出して胸に飛び込んで来い

「仕事着を家に帰って着たくない」ナイスの魔法は朝に解けてる

ひとつだけお願い言っていますかスローモーションで果ててください

朝、一番早く鳴いてる鳥と友達になりたい 企み銀河

柿チョコの旬は二月なんだよね 四季折々の甘味を愛す

二年の視力を解き放ちネコの尿意を見極めており

手・ネコを撫で 手・ネコを抱き 手・母と笑い 死なないでくれ

「おはよう」と鳴いたカラスの気まぐれで胸にできてた黒っぽい影

コンソメを二口飲んでやめましたタイムラインつてうつろな言葉

布団ごと捨てられていく夢を見て火の鳥復活編でも読もう

フォトショップを語るとき思い出してる瞳孔のこと

ミスチルのシーソーゲームが流れててなぜか二度目の乾杯をした

全力で指圧をされて声が出てやっぱりここで死んではだめだ

浮かれててカーディガンのラブフルとか聴いちやうぜ今を知らずに

一言は聞いておいたら良かったかアースジェットで絶えてくいのち

何度でもきみと踏んでく床だろうマグカップとか刺さりながらも

まだほくら不慣れなままでいいんだと卵のずれたオムライス食む

「またあした」そうルビを振る黒い靴、葉牡丹、パンダ公園の雪

ゆれる はだし

たいした事ないが続くよ ほらたとえば左のあれが市営グラウンド
ゆるせない地蔵があつてそのうちの一つがここを曲がったところ
なんでしょう、奇跡だ ゆれるマフラーの上でちいさな蜘蛛が逃げない
前ここにあつたラーメン屋がよくてあっちになって今から行こう
脱いだままのニット帽から傷のないスマホで君はバス停を撮る
マカスのように振ったらマカスの音するアプリをふたりで笑う
国道のせまい歩道へ まぶしくて 君がはじめるむかしの話
同じやつ頼んでそれを待ちながら手の大きさが似てることとか
たいした事ないが続いて右にある市営グラウンド今日はやってない
寒風を防ぐボーズを編み出してそれが全然だめだった夜

カジュアルに死ね 迂回

味のないそうめんほっぺいっぱいも含んだおれを殴るバスケット部

部屋中に読み間違えた駅名が散らばっていてお腹が痛い

一頭の牛からわずかこれだけのシャトーブリアン！井戸に住もつと

太さ零 長さが無限絶対に消化できない棒を飲み込む

丹精にこころを込めて生みだした人造みみずカジュアルに死ね

目薬の染みた毛糸をひっかけてちぎれるほどに引っぱれるフック

とてもすこく橋のない街おもちゃ屋のかえるのおもちゃ売れてしまった

どうやって死ねたんだろう高い枝片っぼだけ結ばれたハンモック

人間の学校は海の底にあって給食のパンがくずれる

バグの皮の余りが消えて消えた先の空間にいる人とする文通

往復書簡



12/12

To 中山俊一<nakayama@rokugayoyakuhayame.shunichi.jp>

改めましてこんばんは、恋をしています。

今回は中山様に書簡形式でインタビューをさせていただきたいと思います。

「書簡形式」と書いただけでドキドキしますね、このメールが手紙みたいになればいいなと思います。

早速最初の質問になります。

中山様はどのような場所でどのように短歌を発表なさったり、あるいは詩作以外でもこういった活動をされているのかまずお聞きしたいです。

本来こういう事はインタビュア側がリサーチしておくべきですが、中山様のプロフィールを見ると色々多方面で活躍なさっているみたいで直接本人のお言葉でそういったことについて聞きたいなと、そんな野次馬的なところもあります。お返事いただけると幸いです。

海岸で風紀委員に怒られた 風がついてる人でよかった

From 恋をしている<koiwoshiteirukai@zenzendaze.hoshi.jp>

To 恋をしている<koiwoshiteirukai@zenzendaze.hoshi.jp>

中山俊一です。この度はお世話になります。何卒宜しくお願いします！

最近は専らTwitterやLINEなどの連絡が多いので、このような形でのやり取り確かにドキドキしますね。笑

では早速、お答えしたいと思います。

発表の場としては、参加している結社の歌誌とTwitterが主で、「うたのわ」や短歌研究の「うたう☆クラブ」などに作品を投稿しています。

詩歌以外の活動としては、映画と音楽をやっています。今年の夏に撮影をした映画「オリンピアの嘲笑」は先月初号上映を無事に終えました。監督はTOHO映画祭グランプリの三原慧悟さん。私は脚本と主題歌を務めました。

音楽は昨年までバンドを組んでいたのですが、メンバーが就職することを決め解散。それからはギターで弾き語りを続けています。

From 中山俊一<nakayama@rokugayoyakuhayame.shunichi.jp>

To 中山俊一<nakayama@rokugayoyakuhayame.shunichi.jp>

こにゃにゃちわ、中山さん！

言い忘れてしまいましたが、このメールのやり取りは基本的に結社誌1月号に載せたいと思いますのでよろしくお願いします。

やはりドキドキですね。あまり堅苦しく考えなくてもいいので、友達とキャッチボールしながら話す感じで軽い、しごく軽い感じでよいかと思います。

なるほどかなり多方面で活躍されているんですね！

映画は本編は拝見できませんでしたが、予告編の動画を見させていただきました。私は映画も音楽も詳しいわけではありませんが、中山さんの短歌にかなり通じているところがある作品に見受けられました。

おれたちは違反速度で駆け抜けた。それが教習コースと知らずに

こういう「もがいた跡」というのを映画にも、短歌にも感じる場所があつて有体に言ってしまうと「青春」というところがひとつの強い色合いとして出ているように思います。

短歌だけでも結社・ネット・商業誌と多くの場で発表されていて、あんまり根気がない私には「ほえ～」と思う部分が多いです。

そこで続いての質問になりますが、中山さんはなぜこれほど多くの場での発表をなさっているのでしょうか？プロフィールを見る限り、結社誌でも「塔」と「かばん」（厳密にはこちらは結社ではないのかもしれませんが）の二つに参加されているようですし、なにかこだわりのようなところがあるのでしょうか？

また、作歌をするうえでもこだわりもしくは「こういう風に歌を作りたい」というようなものはありますか？質問がざっくりしてしまいましたが、簡単に言うと中山さんの「短歌観」について詳しくお伺いしたいのです。お返事いただくと無上の喜びです。

とめどなく流れてここは理科室の蛇口と繋がっている草原

From 恋をしている<koiwoshiteirukai@zenzendaze.hoshi.jp>

To 恋をしている<koiwoshiteirukai@zenzendaze.hoshi.jp>

ウッス！そうですね！このやり取りで恋をしているさんと少しでも距離を縮めることを一つの目標にしたいと思います！今日はTHE MANZAIですね！楽しみすぎる！

その通りだと思います。私は華々しい煌びやかな青春を送ってきてないので、青春には未練があるようです。中学も高校も男子校だったのが一つの原因だと思います。もっと席替えでドキドキしたかったですし、好きな女の子のスカートが揺れているのを見ていたかったです。私の中学と高校はかなり部活動に力を入れていて、男達の汗臭い青春だけが校舎にこびりついていました。そんな牢獄の中で闇雲に女の子に似たキラキラを探していたんだと思います。それが《もがいた跡》なんだと思います。

あとは、映画や音楽をやっていると目の前で夢破れる人を見る人が多いんです。役者を諦めたとかバンドをやめたとか映画監督やめて映像制作会社で働きますとか。そういう友達の《もがいた跡》を短歌で昇華したいという気持ちもあります。相手からしたらおこがましいですが。

おれたちは違反速度で駆け抜けた。それが教習コースと知らずに

引用して頂いたこの短歌は正にそうです。若気の至りと思われても仕方ないですが「バンドで世界を変えてやる！」なんて馬鹿みたいに盛り上がったメンバーが去年の冬にバンドをやめて就職することを決めました。結局、私だけ弾き語りで音楽を続けることになりました。そんな時に詠んだ歌なのです。

多くの場で短歌を発表している理由は多くの人に作品を知ってもらいたいから。それに尽きます。実際、発表する媒体によって読者層は様々です。結社誌とネットでの読者層の違いは明らかですが、「塔」と「かばん」でも読者層また歌人層の違いがあります。それは「かばん」が選者欄や添削制度がなく主宰者もいないという特徴を持っていることが大きな理由です。そして色々な場で短歌を発表することによって【歌人が好きな短歌】と【短歌好きが好きな短歌】の交差点を知り何故そこが交差点になりうるのかを学びたいです。

短歌観について

現在を書け現在を 絶望を咽喉(のみど)の裂けるような叫びを／福島泰樹

現在を書く。生まれたての短歌たちが今を象徴とする点となって散らばってゆく。その点を線で結んだとき、私の軌跡《もがいた跡》が不器用ながらも輝き、私の人間像が浮かび上がれば満足

です。その軌跡を見応えのない平坦なものにしないため幸福を求め走り続ける。

生きているだから逃げては卑怯とぞ幸福を追わぬも卑怯のひとつ/大島史洋

From 中山俊一<nakayama@rokugayoyakuhayame.shunichi.jp>

To 中山俊一<nakayama@rokugayoyakuhayame.shunichi.jp>

ハローミスター中山！hahaha！

お返事ありがとうございます。THE MANZAI面白かったですね。嘘をつかなかったコンビが強かった。

漫才でも言葉が重要になってきますが、今年は「歯多い」という言葉にすごく痺れましたね。歯多い。

中山さんが「青春への未練」というのを言った時に、「ああ」と思いました。男子校というのでも何か妙に納得です。中山さんの歌は非常に男性的だと思って、僕なんかちょっとナヨナヨしてるんですが中山さんは割と「男」ですね。もっと言うと「男の子」という感じです。

先輩の車はブルーで落書きを描くならカモメでも盗難車

僕の好きな中山さんの歌をいくつか挙げさせてもらおうと、まず一つこれですね。これ「落書きを描くならカモメでも盗難車」っていう語順がすごく違和感というか、収まりの悪い配置に見えるんですよね。「でも盗難車」って別に繋がってない。「ブルーだから自分の車だろう」って人は思うわけじゃないから。結局「カモメをかけそうなブルー」に焦点がいくのか「盗難車」に目を持って行っていいのか全然わからなくなる。でも、とてもとてもそこに「もがいた跡」があるんですよね。その時の感情で「この言葉をそこに入れなきゃ」って思ったのが見えて、とてもカッコイイ。この語順じゃないとこういう雰囲気は出ないし、「男の子」だから出せる青臭さだと思うんですよね。

火から目を離すな俺の目を見るな焚き火を囲むゲイのカップル

あとこれも素晴らしいと思います。これってお互いがお互いに「火から目を離すな」と「俺の目を見るな」を思っているんだろうな、と感じて。僕はめちゃくちゃ女の子が好きなので、ゲイの方の気持ちは分からないんですが何となくゲイのカップルは自分らが「禁忌」的な存在だということを意識しているように感じるんですよね。カップルでお互いに気持ちを確認し合ったはずなのに、それでも二人の間には何となく火で隔てられたような感覚がある。でも激情はあるんですよね、それを静かに抑えるかのように互いが火を見ると自分に暗示をかけていく。こんな場面を切り取った短歌は見たことないですし、そしてそれを完璧に捉えられていると思います。

上の二首みたいに「男」（先輩・ゲイのカップル）っていうのがガンガン出ている歌って、すご

く強い思いを感じるんですが反面中山さんの歌には「少女」が割とよく出てきて、これは全体的に淡い印象があります。どこか夢見るような、それこそ男子高校生が青春への未練の果てに見た幻のような感じがします。

>【歌人が好きな短歌】と【短歌好きが好きな短歌】の交差点を知り何故そこが交差点になりうるのかを学びたいです。

すごく分かります。そしてそれを実現するために様々な発表媒体を選んでいる姿勢にも、驚かされます。

現在を詠うという点ともこれは合致しますね。その交差点を生み出すのは「いま」を生きている歌人であり、「いま」を生きている短歌好きですものね。今年のTHE MANZAIは「ネタ」っていう感じのネタをしたコンビではなく、「自分」を見せたコンビが強かったですね。普通の世間でも例えば「ツッコめよ」とか「ボケたのに」なんて言葉が蔓延してきた「いま」は、見ている方の目もお笑いに慣れてしまい結果的に「笑いの構造」みたいなものが何となくわかってしまっている人が増えました。だからこそ、そこに「構造」が透けて見えない「生」の人間性を見せた方々が強かったのだと思います。

大分話がずれてしまったようですごめんなさい。ちょっと喋り過ぎたのでクールダウン質問させてもらってもいいでしょうか。

中山さんってモテますか？

From 恋をしている<koiwoshiteirukai@zenzendaze.hoshi.jp>

To 恋をしている<koiwoshiteirukai@zenzendaze.hoshi.jp>

ウッス！！！！いやあ最高でしたねTHE MANZAI。歯多いは私も痺れました。

まさかこの二首を拾ってくれるとは！これが「なんたる星」の懐の深さですね。笑 個人的にはお気に入りの歌なのですが取り上げてもらう機会が少なかった二首なので嬉しいです！

先輩の車はブルーで落書きを描くならカモメでも盗難車

私は映画からイメージを膨らませて短歌を詠むことが多いのですが、この短歌は北野武監督作品『ソナチネ』から着想を得た歌です。私は北野武監督が大好きで、特に初期作品に顕著に感じられる犯罪の匂いと緩い笑い。そして褪せた青色(所謂キタノブルー)の組み合わせが悶えるほどに刺激的だと思うんです。そこでブルーと盗難車は使いたいフレーズだったんです。この短歌は映画のストーリーとは無関係でイメージだけを頂いたものです。私の妄想では、あまり好きじゃない不良の先輩が盗難車でドライブに行こうと誘ってくるんです。先輩は自分の車ではないのでとても荒い運転をします。だから私は先輩とのドライブが嫌なんです。どうにかして、この不良の先輩を懲らしめたい。そんなことを考えた時、みうらじゅんが冗談交じりに言っていたセリフを思い出しました。「暴走族は名前がかっこ良すぎる、オナラプープー族にすれば数が減るはず」。私はこのブルーの車に不良には似合わない可愛いカモメの落書きを描いてやろうと考えるのです。でも、それは盗難車なので勝手に落書きするのは申し訳ないなと思いとどまる。結局、私は何も出来ないまま先輩の車に乗ってガタガタと田舎道を走るのです。盗難車だからと手荒に扱う先輩と盗難車だから手荒に扱えない私の気持ちのズレを描いた歌なんです。そして収まりの悪い配置が私の収まりの悪い気持ちと共鳴しているんだと思います（これは言われて思ったことですが）。前述した妄想のストーリーをこの短歌だけで分かる人は少ない不親切な歌だと思うのですが、恋をしているさんのように感覚的に「なんかカッコイイ」とか「男の子の青臭さ」や「もがいた跡」を掴んでもらえれば良いなと思っていました。

火から目を離すな俺の目を見るな焚き火を囲むゲイのカップル

素晴らしい読みですね。その通りです。火の捉え方にも恋をしているさんのセンスを感じます。念のため言っておくと私もゲイではないです。女の子が大好きです。これは上の句だけが先に完成していて、下の句が思いつかなかったので保留にしていたんです。最初はキッチンにいる男女カップルの設定で詠もうと思っていたんですが全然面白くなくて困ってました。しかし、目線ってことで一つ思い出したエピソードがあったんです。私が男子校だったという話をしまし

たが、クラスにゲイの男の子がいたんです。クラスの中では「アイツと目を合わすとターゲットにされるぞ」みたいな噂があったらしいのですが、私ほどのスクールカースト最下層の人間にはそんな情報は伝わってくるはずもなく、ゲイの男の子と目を合わせてしまったんですよね。それから、その男の子が私に話しかけてくるようになって(私は彼がゲイであることさえ知らなかった)普通に良い奴だったので仲良くしていたんです。そしたら、私がゲイであるみたいな噂が流れるようになって、そこで初めて彼がゲイであることを聞いたんですよね。そんなエピソードからヒントを得て下の句を作りました。ちなみにゲイの彼とは今も友達でfacebookを覗いたらゴリゴリに化粧して笑顔でピースをしている写真がありました。吹っ切れたゲイになったのでホッとしています

今年のTHE MANZAIから学ぶことは多いですよ。結局、情報過多の時代で全体的にボヤけた世界の中、視聴者は本質を見抜きたいって気持ちが強まってきている。もうフィクションを楽しめなくなってきている。コント番組は激減して、芸人さんの日常や趣味また暴露ネタ、オピニオンリーダーが社会を切って問題を明るみに出すみたいな番組も増えてきてますよね。そうになると、どうしても小手先だけじゃ通用しない。生身の勝負。人間力が試されますよね。これはあらゆる芸術にも通じる点で、良いものを生むには良い人間にならなくちゃいけないのかなと思います。良い人間に一つの基準が出来てしまうと芸術はつまらなくなるとは思います。

全然モテないですけど帰国子女には何故かモテます。理由は分かりません。好きな子の英語の発音が良かった時「もしや!？」って思います。

From 中山俊一<nakayama@rokugayoyakuhayame.shunichi.jp>

To 中山俊一<nakayama@rokugayoyakuhayame.shunichi.jp>

ごきげんいかがでござんしょう、中山様こんばんは。

雪が降るらしいとのことで、外に出るのが大変だなと思うと同時に人がきっと美しく見えるだろうということに少しワクワクしたりしています。

盗難車・ゲイのカップルの歌ともに中山様の解説をととても興味深く拝読させていただきました。不親切な歌という言葉がありました、個人的にはちょっと不親切なぐらいの方が歌は面白いと思います。よく言われることですが、全部が分かってしまったらつまらないですものね。あっしの中では「なんかイイ」というのは最高の賛辞なので、どうか誤解なきよう。

視聴者の本質を見抜きたい気持ちはすごいですよね。誰もがみんな「騙されまい」と思っている感じがピンピンして僕なんかはどんどん騙されましようなんて思うんですが、中山様のおっしゃる通りだと思いますね本当に。

>良いものを生むには良い人間にならなくちゃいけないのかなと思います。良い人間に一つの基準が出来てしまうと芸術はつまらなくなると思いますが。

これがでも一つのカギというか、この良い人間っていうのがそれぞれ異なっているからこそ世の中はギリギリ面白ハッピーですよ。良い人間になろうとする人は、自分が信じるその「良い」をひたすら信じているように見えます。その信じる強さが大きければ大きいほど、それに近づくというか、自分が思う「良い人間」ではない人でも、その思いの強さだけで感動したりするような気がします。

ところであっしは今衝撃を受けているんですが、もちろんそいつはですね、中山様が帰国子女にモテているということです。うらやましい。

あっしも二回目の返信にして「ミスター中山」と言ってしまうほど、「外国」を呼び込む力が中山様にはあるのかもしれない。

そういえば、前回の返信で書いていらっしゃいました【歌人が好きな短歌】と【短歌好きが好きな短歌】の交差点という言葉がありました、これに【短歌を知らない人が好きになる短歌】という点は結びつかないんですかね。例えば帰国子女の女の子に、例えば中山様の恋人であったり、そういう「短歌とは普段無縁な人」に向けて短歌を作るあるいは自分の作品を見せたりすることってありますか？

From 恋をしている<koiwoshiteirukai@zenzendaze.hoshi.jp>

12/19

To 恋をしている<koiwoshiteirukai@zenzendaze.hoshi.jp>

こんばんは。お返事遅れてすみません！私の地元では雪は降りませんでしたが、恋をしているさんの言葉からこの二首が頭に浮かびました。雪が待ち遠しいです。

雪に傘、あはれむやみにあかるくて生きて負ふ苦をわれはうたがふ/小池光
傘をさす一瞬ひとはうつむいて雪にあかるき街へ出でゆく/藪内亮輔

おお。いえいえ！最高の賛辞ありがとうございます！

私も極上な嘘なら騙されたいタイプの人間です。

世の中はギリギリ面白ハッピー。いいお言葉です。

>「短歌とは普段無縁な人」に向けて短歌を作るあるいは自分の作品を見せたりすることってありますか？

特定の人に向けて短歌を詠むことはありません。誰かのために詠んだ歌も不特定多数の方々に愛されるものにしようと思っています。つまり、「短歌とは普段無縁な人」は常に意識している対象です。短歌と無縁な人々っていうのは余りにも人数が多いのでカテゴライズしにくいですね。

From 中山俊一<nakayama@rokugayoyakuhayame.shunichi.jp>

To 中山俊一<nakayama@rokugayoyakuhayame.shunichi.jp>

どうもどうも、中山アントワネット！

雪に関する歌はとても素敵なものが多いですね。雪はロマンチックワードのかなり上位だと思えますが、中山さんが提示してくれた二首はどちらにも「傘」が出てくるんですね。そして、それによって雪のあかるさだけでなくそこに付随する「暗さ」が表出しているのが面白い。確かに僕の「雪の日に外出している人々の美しさ」というのはこういう陰影のある明るさに近いと思います。

特定の人に向けて短歌は詠まないということなんですね。

俺にとっては「短歌と無縁な人々」こそ、意識しないと捉えられない対象に思っていました。「短歌を読む・短歌を作る人」の方が圧倒的にマイノリティで、基本的に読者も作者も歌人という状況下では、「想定する読者」というのがどうしても「短歌関係者」になってくると考えていたからです。

俺はもともと「ネット大喜利」という簡単に言うとお題があって、それに対して面白い答えを出すという遊びをやっていてそれと同時期に短歌も始めました。「言葉を扱って対象になんらかの感動を与える」という点で短歌も大喜利も近い存在ではあると思っていたんですが、もう一つの共通点がいわば「作者と読者が同じ土俵にある狭い世界」ということだと感じています。そういうところに長く身を置くと、必然的に玄人に届いて欲しいという意識が出てきてしまう。その点、中山さんの作歌に対する姿勢は「なんたる星」でも見習いたいといま強く感じていたりします。

さて今度の質問は非常に個人的なことにもなったりしてあれなんですが、中山さんから見て「なんたる星」という結社はどのように映っているのでしょうか。そもそもメンバーがほぼ固定で指導者がいるわけでもないのに「カッコイイ響きだから」という理由だけで「結社」を名乗ったりしている我々が、普段結社でも活動されている中山さんにはどう思われているのか、聞きたいです。差し支えなければ。とても、個人的な夜に。

From 恋をしている<koiwoshiteirukai@zenzendaze.hoshi.jp>

To 恋をしている<koiwoshiteirukai@zenzendaze.hoshi.jp>

ウッス！恋をしているさん。恋をしているさんは恋をしているんですか？また何に恋をしているんですか？私から質問するのはお門違いかもしれませんが読者も気になっていることだと思うので。翳りのない明るさには心惹かれない。ベ○キーに心惹かれないのも私の中では同じくです（人としては好きですが）。でも時々ベ○キーが犯罪者だったらドキっとするなあとか。もし犯罪者なら共犯したいなあって思います。

常に意識している対象ですが捉えることが出来ているかは別問題です。そこは仰る通り、想定する読者はあくまで想定 of 読者だからです。難しい。

「笑い」と「短歌」はかなり似てますよね。私が思う共通点はどちらも共感と驚異の上に成り立っていることです。表現における共感と驚異については穂村弘さんがよく語っていますが、笑いに置き換えるとあるあるネタとシュールなボケですよね。

俵万智さんが【言葉の使い方が上手いアーティスト】の第一位にレイザーラモンRGさんを選んだと聞きました。私としては歌人である俵万智さんが芸人のRGさんを選んだのはとても興味深いです。何故ならRGさんのあるあるネタも分かり易いほど共感と驚異で出来ています。しかも、RGさんは歌のメロディーという定型に当てはめるために文章を推敲する作業をしているんです。そう考えると（もう短歌じゃん...）って思います。このことはオードリーのオールナイトニッポンでゲストにRGさんが出演する回を聴いて感じました。このラジオでRGさんは「あるあるは真理だ」ってセリフを吐くんですが最高なので良かったら聴いてみてください。

なんたる星は私にとって怖いほど魅力的です。その魅力の一つは読者である工藤吉生さんがブログに綴っていたようにはこの発表方法ですよね。ネット短歌結社ということで読者の窓口が広い。しかもタダ。これも実は大きな魅力だと思います。あとは、選者や指導者がいないこともあって皆さん自由に短歌を詠んでいますよね。12月号の恋をしている「ダンス」のような表現は普通の結社じゃ出来ませんから。皆さん創意に満ち溢れていて素敵です。あとは、メンバーが少人数なので歌人ひとりひとりに愛着が湧きます。愛着というと気持ち悪いですが、何となく皆さんの人間像が頭に出来上がった状態で作品を読むことができる。これは大きなメリットだと思います。そして、フットワークが軽い。これも少人数であり指導者がいない故に出来ることだと思います。星月歌合戦や今回このように私のような歌人をゲストとして招いてくれたり、その発想にフットワークの軽さを感じます。ただただ感謝感謝。

From 中山俊一<nakayama@rokugayoyakuhayame.shunichi.jp>

To 中山俊一<nakayama@rokugayoyakuhayame.shunichi.jp>

とうとうー！恋しーです！

中山様逆質問ありがとうございます。恋をしているが恋をしているかどうかは、ファンが悲しむのであまり明かしたくはなかったんですが中山様の質問とあれば仕方ありませんね……（餅つくドレミファソラシドが洪水に乗ってやってくる映像）

私には愛がないんじゃないか、と思うことがあります。好きな人がいます。ものすごく好きだと思んです、きっと。でも自信がなくて、とにかくあらゆることに自信がなくて、それはもうドチャチャランチャー（すごい撃てる銃をイメージしてください）というぐらい、なくて。それは容姿うんぬんとか、経済力うんぬんとか以前に、とにかく私は私という人間を信用できない。散々いろんなことから逃げたりしてきたのを見ているからこそ「その人に対して本当に愛があるかどうか」が、分からないんです。だから私が恋をしているかどうかという問いに対する答えは「恋をしているといいなあ」です。本当にそうだといいなあ。

俵の万智子さんがR Gさんをそんな風に見ているなんて、すごくイイですね。俺がこうやって「なんたる星」を作ったのもまさに笑いに対して「もう短歌じゃん……」という思いがあったからで、実際に大喜利でもほとんど詩のようなボケを投稿して一時期その界限に謎の空気を作っていた私ですが、意外と「お前ポйна」とはならなかったです。同じ空気感がそこには流れていて、本当に笑いと詩は紙一重って感じがしますね。

なんたる星についてもお答えいただいてありがとうございます。フットワークの軽さとか自由さってというのは、確かに我々がとても大事にしたいと思っているものです。もともと全然違う角度から殴り込みのようにやってきた集団なので、最初はネット上に根付いている短歌文化とは全くつながりがなく、ある意味で怖いもの知らずだったというのもあって大分自由にやらせてもらったと思います。同時に、我々みたいな素人からスタートした人間が恥ずかしげもなく結社を名乗り短歌を発表することで、それを見た短歌の初心者やまだそこに足を踏み入れてない人が「短歌自由過ぎワロた。こんなんワシでもできるし（爆）」とってくれたら本当にうれしいなと思っています。

本当の事を言えば、「なんたる星」という結社は僕こと恋をしているが「短歌をやめないための理由」になるように始めたものでした。飽きっぽくて何も続かないあっしはこうやって仲間を集めて色々計画を立てることで逃げ場をなくせるんじゃないかと思ったんですね。それが中山様に愛着をもってもらえるようになったのは本当に幸運なことです。こちらからも改めて感謝申し上げます。本当にありがとうございます。

さて色々お話させていただいた文通（インタビューとは？）もこれで最後にしたいと思います。
始めは中山様の短歌の魅力を是非読者に！と息巻いていましたが、途中からただただお手紙のやり取りを楽しんだだけになってしまった気がします。至らないところも多々あったかと思えます。申し訳ございませんでした。でも、とても楽しかったです。
不躰ながら最後の質問をさせてください。

中山様が短歌を始めたきっかけは何ですか？

風紀委員あなたの胸に抱かれて私は宝石商の声音だ

From 恋をしている<koiwoshiteirukai@zenzendaze.hoshi.jp>

12/24

To 恋をしている<koiwoshiteirukai@zenzendaze.hoshi.jp>

ういっす！お疲れ様です！

お答えありがとうございます。この話について私が足を突っ込むと二人して泥沼にハマリそうなのでやめておきますね。笑

ただ、最後のメールで恋をしているさんのことがよく伝わってきました。とても嬉しいです。

>>中山様が短歌を始めたきっかけは何です たまか？

歌うわけでもない歌詞や渡すわけでもないラブレター、打ち明けるわけでもない叫び。そのようなものをメールの下書きフォルダに書き留めて書き留めて、気づいたら溢れる程の量になりました。こんな掃き溜め何になんだよって思っていました。下書きフォルダは送信ボックスとゴミ箱の間にありまして、それを見たとき迫るものがあったんですね。ゴミ箱に捨てるよりも、どうか世界に送信したい。そう思ったときには短歌という表現方法が頭にありました。昔から短歌が好きだったので。今でも下書きに保存された思いを送信ボックスに入れるようにして短歌を詠んでいるのかもしれませんが。不特定多数に送信される私の短歌が皆様にとって迷惑メールにならぬよう日々精進したいと思います。

From 中山俊一<nakayama@rokugayoyakuhayame.shunichi.jp>

【編集後記】

ハッピーニューイヤー！！本年も「なんたる星」をよろしくお祈いします！
というわけで、新年一発目の「なんたる星」はゲストに中山俊一さんをお迎えてのスタートとなりました。

中山さんはまだなんたる星が産まれたての頃にお声がけしていただいたご縁で今回ゲストという形でお招かせていただきました。

往復書簡ではインタビューと言いつつ中山さんと友達のようなダベリをしたりもしてしまいましたが、中山さんの短歌、そして中山さんの人間としての魅力が伝われば幸いです。「塔」「かぼん」に所属している中山さんにいい刺激をもらい、まがりなりにもネット短歌結社を名乗る「なんたる星」にも今後還元をしていければと思いながら、来月号で「なんたる星」も、一周年を迎えます！

だからと言って何が変わるわけでもなしですが、今後とも「なんたる星」と chill wind yeti をよろしくお祈いします！（テンパって僕がやっているカードゲームで4コストなのに破格のスペックを持つ強力カードの名前を書いってしまった！ハッピーニューイヤー！！）

2015 1/1 恋をしている

バス停に手を置く。星の駅を感じながら、それはポウル、ポウル、と鳴く――

執筆者

はだし([@sunsetsan0](#))

ナイス書 ([@NiceGuuuy](#))

恋をしている ([@yayoikenumai](#))

迂回 ([@ukaian](#))

スコラブ([@scope_scape](#))

なんたる星 1月号

発行日：2015年1月1日

編集発行人：恋をしている

ゲスト：中山俊一 ([@poseidon_29](#))

表紙：スコラブ

Twitter：[@nantaruhoshi](#)

Mail：nantaruhoshi@excite.co.jp